

過去問の重要性

●過去の入試において出題された問題と解答解説を載せた問題集を通称過去問と呼んでいます。入試で合格を勝ち取るためには、この過去問の研究は必要不可欠なものです。認識が十分でない受験生もまだ目につきます。

●過去問を解く第一の目的は出題の形式と傾向をつかむことです。出題が記述式なのか選択式なのかによっても勉強のやり方は違ってくるのです。それぞれに対応できるような訓練をやっておかなければ合格点は望めません。

●第二の目的は、過去問を解くことによって現在の自分の学力と合格ラインとの差を確かめ、残り期間でその差をうめていく作業を集中的にやることです。自分の受験校の出題に合わせて弱点・盲点を確実に補強していくのです。したがって、ただ漠然と過去問を解くだけでは意味がありません。知らなかった知識を身につけ、解けなかった問題の解法を習得していくことが必要です。過去問で弱点・盲点が発見されたならば、これまで自分が解いてきた問題集等その部分は集中的に復習をやるべきです。ここまでの作業をして初めて過去問を解く価値が生まれてきます。つまり、解いたあとの作業



に時間をかけなければならぬということ。受験において過去問に勝る参考書はないということ。肝に銘じましょう。

●では、いつから過去問に入るのか？ 中3生は夏期講習から。創学舎では夏期講習中に過去問を解く時間を設け全員に解いてもらいます。まだ未習部分が残っている……。そんなのは承知の上です。どういう出し方なのか、どれくらいの難しさなのか。実際に自分で頭を使い、手を動かしてみないと実感できません。20点、30点の科目もあります。構いません。入試問題を体感することで、これからの勉強への覚悟が違ってきます。

●高3生の中には、もう解き始めている人もいますが、一般的には9月から始めると考えてみてください。目的は中3生と同じです。ただし、受験勉強で使用する教材の数は莫大ですから、8月末までに相当量を済ませておくことが条件になります。計画をたて、地道な勉強を進めてください。(村上)

駒走先生のいふこと

●英語が苦手だった。中学の定期テストはとれるが、模擬テストはひどかった。どうやればいいのか分からなかった。高校入試は無事合格して、高校生となったものの、英語への不安を抱えたままだった。どうすればよいのだろう。考えても考えても自分では答が出せない。

●そんな私を救ってくれたのが、駒走先生だっ

た。「いいですか。英語は構造と直訳ですよ。きれいな訳はいりません。構造がはっきりとつかめた英文を何回も何回も直訳するのです。」彼は授業の度に同じセリフを叫び続けた。鹿児島県と熊本県との県境の高校。予備校などあるはずもなく、その中で彼の声は神のお告げであった。この人がここまでいうのだからやってみよう。そう思って、彼の教えを実行した。始めてから少しずつ変化がおこった。高1の1学期はリーダーの予習に毎回1〜2時間かかったのが、2学期になると30分。3学期は20分。どんどん予習の時間は短くなっていった。



●高2でも高3でも、幸いなことに駒走先生の授業を受けることができた。彼は言い続けた。「いいですか。構造をつかんで直訳ですよ。」「通訳の人がきれいな訳をしますか。構造をつかんで、直訳をするんですよ。いくつかの技術はありますが、直訳です。」「受験のとき、いちいちきれいな日本語に直す時間がありますか。構造をつかむ力をつけて、直訳でどんな訳していくんです。」「読むというのは、字をみることでありません。意味をつかむことです。意味をつかむには、訳すしかないでしょう。」「概念をとらえるには、国語力も必要ですよ。」

●高校生に英語を教えているが、心の中にはいつも駒走先生の教えがある。気がついてみると同じことを生徒にも指導している。小金のビリ

にも教えた。東葛のビリも来たし、柏南のビリもいた。しかし、みんな崖っ淵にいたので、指示を守った。構造が分かった難しめの英文を頭の中で直訳する作業をくり返す。10回、20回ではダメ。100回ぐらいやらないと変わらな。で、彼らは？ やった。しつかりやった。全員MARCH以上に合格。(因みに教材は大学受験部で使っている構文のテキスト。)行き詰まっている高校生。誰だって伸びるよ。

●ここで「英文を読む」ことについて考えてみよう。生徒は、英文を読むとき、まず文字だけを目で追っている。だから、「読んだ」といっても何か書いてあったが覚えていない。少ししになると、知っている単語の意味をつないでいく。しかし、英文は長いし複雑なので本当に断片的なことしか分からない。更に、辞書を引いて全ての単語の意味を調べればある程度の内容はつかめる。そして自分なりの訳を作って学校の授業に臨む。授業では、教師の説明と訳を写して、テストの前にそれを覚えこむ。そういうことをくり返した結果、初めてみる英文が読めるようになるかといえは、ほとんど読めない。つまり、「英文を読む力」は全くついていないのだ。



●これは「英文を読む」ことの定義が分かっているから。そして「どうすれば読めるようになるか」の方法が分かっているから。塾で指示されたとおりに練習は続けてほしいが、理屈で納得してもらおうために、定義

と方法を明らかにしていきたいと思う。
(以下次号)

(小林(健))

漫画と温故知新

最近の創学舎ニュースでは書籍に関わる文章が多いようなので、私もそれに乗っかることにしよう。但し、漫画である。今回取り上げる作品は横山光輝著『マーズ』だ。昭和51年から昭和52年にかけて発表された作品だが、前半部分は2005年に上映されたステイブン・スピルバーグ監督の映画『宇宙戦争』にやや似た展開となっている。いや順序としては逆というべきか。そんな『マーズ』はこんな感じのストーリーになっている。

はるか太古に地球を訪れた異星人が地球人の潜在的な進歩の可能性とその残酷な本性を恐れて、宇宙にとつて地球人が危険な存在となった場合に地球を破壊する少年「マーズ」を送り込んでいた。そんな彼が目覚めるところからストーリーは始まる。マーズは、火山活動の影響により予定より100年早く目覚めたため、地球を破壊するという使命を忘れていた。マーズと同じく異星人により地球に送り込まれた六人の監視者は、危険な存在となった地球人を滅ぼすよう、マーズに促すが、地球人が危険な存在とは思えなかったマーズは、地球破壊ロボットでもある「ガイア」とともに、六人の監視者と彼らの操るロボット「六神体」と戦



う決意をする。ところが、当初は人間に好意的だったマーズは、お互い殺しあう人間や「地球が滅ぶとは嘘だったのか」と石を投げつけてくる人間の醜い本性に触れ、また暴徒を射殺する自衛隊を目の当たりにし、「自分ハ何故コンナ生物ヲ守ツテキタノダ」とつぶやき、……。

この先はご自身で読んでもらいたいですが、なかなか衝撃的な結末を迎えることになる。こう書いてしまえばある程度展開は想像できるのだが、注目してもらいたいのは本作品の最後の文である。大変な空虚感があり、何とも言えない余韻があるのだ。「数知れない惑星のうちのひとつがその歴史に幕を下ろした……。」というあっけない一文での終わり方。あの読んだ後の空しさは……。何とも表現できない。

私はこのような作品を世に送り出した横山光輝という人間が、漫画家というカテゴリーに含まれることがいささか腑に落ちないでいる。

この『マーズ』という作品で、人間のエゴや醜さを著した文学者としか思えないのだ。作品最後に書かれた一文の重みは大文豪のそれと変わらないと思う。個人的には芥川龍之介『羅生門』の最後の一文「下人のゆくえは、誰も知らない。」の余韻に似たものを感じる。

近年漫画は文化として世に認められているし、日本が世界に誇る商品といってもいいだろう。最近の漫画から得るものも多いだろうが、横山光輝や手塚治虫などのいにしえの漫画にも感じ入るものがある。このような昔の作品を読

むことで、これからの自分の感性を磨いてみてはどうだろうか。正に「温故知新」である。

(山崎)

だれかは内緒です

私は普段あまり芸能人とか、歌手には興味がなく、ときどき自分の気に入った人のものを聞く程度でした。

しかし、最近同僚の先生に勧められてある歌手(グループ)の映像を見ました。すると、なぜか引き込まれすっかり魅了されてしまいました。一応その人たちのことは知っていましたが、特別気にもありませんでした。しかし、なぜ引き込まれたのでしょうか？

正直歌もうまいとも言えず、ダンスもそろっているわけではありません。思うに理由は二つあるようでした。一つは、曲調が私の好きな感じだったからです(ノリがいい)。

もう一つは、歌やダンスに全力投球している様子が伝わったからです。



私たちは普段、生徒たちに前向きな姿勢を持って進んでもらいたいと思つて授業をしています。ある意味その姿勢を分かりやすく体現している若い人を見て感動したのです。全力投球している姿は人に感動を与えます。野球の甲子園やオリンピック、ついでに運動会のリレーなど、いろいろな場面で感じるすることができます。

よく考えると私たちは毎年そういう生徒を見ている。受験前の中3生。合宿に行ったときの生徒の様子。定期テストに本気になって向かっている生徒。体をめいっぱい動かして表現しているわけではないですが、全力投球していることには変わりません。

人に感動を与えることは何も特別な人たちだけの特権ではありません。普段の私たち、みんなもできることなのです。

別に、みんなに人に感動を与えるために全力になれというつもりではありません。しかし、全力投球している人は、人に感動を与えるほどのエネルギーを発しているのです。人にエネルギーを与えるということは自分もエネルギーを得ていると思えます。素晴らしいことだと思えます。自分にもエネルギーを与え、人にも与えられる。

みんなもそういうエネルギーの出し方をしてもらいたいと思えます。部活の時間は部活に、塾の時間は勉強にとメリハリをつけて、全力投球できるといいと思いませんか？私もぜひそうなつてもらいたいと思えます。

私のエネルギーはまだまだみんなに届いていないかもしれませんが、私自身もみんなにエネルギーを与えられる人になっていきたいと思えます。
(松水)

▼▲継続希望の方へ▲▼

- ▶卒業や転校等で創学舎を離れた方にも、ご希望があれば創学舎ニュースを無料でお送り致します。
- ▶在籍していた教室までご連絡下さい。